論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　韓程善（ハンジョンソン）

本論文「江戸川乱歩と映画——1920 年代日本文学における映画受容の文脈から」は、江戸川乱歩が探偵小説家としてデビューする直前、未だ「平井太郎」の本名で活動写真制作を志していた 1920 年代に焦点をあて、平井太郎と活動写真との関係をあらゆる側面から実証的に洗い出しながら、それがいかに後の小説に昇華していったのかを作品論としても跡づけた意欲作である。

2000 年代に入り立教大学を中心に、乱歩の蔵書や原稿、資料の整理が大幅に進んでいる現在、乱歩研究も新たな展開期を迎えているが、本論文はそうした活況にさらに新たな成果を提供するものとなり得ている。

元来「乱歩と映画」というテーマでは、現在までに 40 本を超えて制作され続けている乱歩小説の映画化がすぐに思い浮かぶが、韓程善氏はその方向ではなく、「乱歩（あるいは平井太郎）における映画的想像力の解明」という視点で追究したところに、第一の特徴があると言える。さらに筆者は、平井太郎の映画熱および映画研究をより立体的に捉えるために、無声映画全盛の 1920 年代に、多くの同時代文学（者）にとって映画とは何であったのかを、詳細に調べ上げた。

映画雑誌、新聞連載小説の映画化、映画小説、シナリオなど、これまで全くと言って良いほど知られて来なかった一次資料を膨大に駆使することで、映画文化論としても読み応えのある背景を押さえ、それを江戸川乱歩の小説分析に活かすという効果的な方法を用いた点も、本論の特徴であると言えよう。

本論は全体が三部（全五章）で構成されており、第Ⅰ部と第Ⅱ部が有機的に第Ⅲ部につながるというかたちを取っている。

先ず第Ⅰ部（第 1、第 2 章）では、「映画と文学と 1920 年代」と題して、無声映画時代に「文学と映画」がいかなる関係にあったのかが、乱歩以外の作家たちを中心に記述される。その際、日本文学研究の領域でこれまでかなりの実績が積まれている「新感覚派あるいは谷崎潤一郎と映画」研究の実績を踏まえながらも、それ以外の作家たち（菊池寛、岸田國士、芥川龍之介、佐藤春夫など）を取り上げたところが新鮮である。ここではまず、文部省関係の新出資料が提示されることによって、例えば 1925 年頃の最盛期には「２、3 日に 1 冊」は日本のどこかで映画雑誌が創刊されるような熱狂が渦巻いていたことが、初めて明らかにされている。菊池寛原作の新聞連載小説の映画化が、きわめて戦略的に行われていた様相も、当時の新聞記事を渉猟することで浮かび上がった。

さらには、「文学者と映画」とが、単なる熱狂や友好という側面で語れるものではなく、文学の可能性が映画に取って代わられるのではないかという潜在的不安や対抗意識が、逆に、文学者たちを映画制作や、新しいシナリオ形式の創造に向かわせていたことが、丁寧なテクスト分析によって明らかにされている。

続く第Ⅱ部「平井太郎と活動写真」（第 3 章）では、無名時代の平井太郎が、映画監督を志して研究、執筆した 5 編の映画論（1917 および 1920 年）のうち、いまだ活字化されていない 4 編について、全文の翻字を施し、それに解説を加えたものである。「映画論」「活動写真のトリックを論ず」「トリックの分類草稿」「トリック写真の研究」と題された 4 編は、すでに浜田雄介氏によって翻字公表されている「写真劇の優位性」と共に、演劇に対する映画の優位性を強調し、映画の特徴としてトリック（現在呼ぶところの特殊撮影）を再認識してその詳細なトリック分類を試みたものであることが、最終的に明らかになった。日本語を母語としない筆者によって、多年の努力によって翻字された新出資料の価値はきわめて高く、その分析も適切である。

最後の第Ⅲ部「江戸川乱歩の映画的想像力」では、彼の代表的小説でもある 4 編「白昼夢」「踊る一寸法師」「火星の運河」（第 4 章）そして「パノラマ島奇譚」（第 5 章）が取り上げられる。これまでの論述で明らかになった 1920 年代の映画熱狂や文学者たちの映画への取り組み、そして乱歩自体が映画的想像力の核として持っていた「怪奇幻想」のテーマや「トリック」の技法を、作品分析のための鍵として用いながら、新たな作品解釈に挑んだ。その際、映画好きの乱歩が当時鑑賞した同時代欧米の数多くの無声映画を、比較対照の材料にしたことも、作品分析に効果的な力を与えている。

審査会ではまず一致して、この論文が新たに提供した、平井太郎執筆の映画論翻字資料を初めとする、1920 年代映画文化に関する膨大な一次資料の貴重性、それを探究した筆者の努力、さらに江戸川乱歩の小説における映画的想像力を一貫して分析しようと試みた姿勢が、高く評価された。とりわけ、第Ⅰ部、第Ⅱ部の完成度が高く、早い段階での公刊が望まれる。

同時にそれだけに第Ⅰ、Ⅱ部に比べ、第Ⅲ部の小説分析にいまだ弱い部分があることが具体的箇所で指摘された。その根源には「小説における映画的表現」とは何かという、到底、本博士論文だけでは解決不能な問題が横たわり、筆者がその困難に最初から自覚的であるだけに、今後さらなる精錬が期待される。

しかし以上の指摘は、あくまでも今後の進展への希望として語られたものであり、本論文の価値を損なうものではないことも確認された。

以上の審査結果を踏まえて、本審査委員会は全会一致で、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。